紫文製錦

春夏　一

内閣文庫

ほとゝぎす歌をよむとおもへる人のあやまりは
もさらぬも文といふ物のうるさきをおんいと
くちをしうるべきをもだ哥をんして
うゑまぜるせんざいのめく文もかの川
うらなる野山のさゝ海なるべし紙ハこゝは
やうゑ堅つゝくふミハ大ゝ多ぐ古ゝ

のさ海ふ〜てことさらふつくろふ和をな
きあらうめとまわんやまるふ〜何りて
おなじ木ふもをりうら和らのいはもそし
てんをぐ〜ぐさうるぐめくあれいるべきかく
をバ物まわびふんよせあれ人をいづれ
をもるの〜てわざと学ぶどとあ此をぐれ

ことぐを一まうりを尼いをおくべうそさる
をみやびわざふもいはもまめをぐふもいれ
さらび詞ならで記し杉の海おしきうや
うあらうをいわわん をや或を月花の帝岳
のをわふ〜いあおうとあがゆる物のけう
なぐふ歌のをふハよふのみつら〜がくて詞ふ

もいさまちくまして主もたれかに相もるか
どの旅路のありさ海めづらしうむ海山
のきくれ河ハもみくもむ雲霧のあくぼ海
ひきべてんる相きくれ相ふつけてうぐくんの
ゆくへをバのれ走るして人ふもあハもと
おもハせ後の世ふ無つるへて志のづもぬべく

ていうふかひある筆の跡なるべきをつゆう
んふなくハおうぬさ河りていで一くぶ
ものと思へどつきづくれた詞もうぶめぞん
さんやてむなくやうぬるうれいるれた
わぶなるぶやハされど歌よむ道のもる
べき代くふ人く相して何れと書ぶ毎

ひとおもうめれど文章のたてハそ意と見
ゆるゝ〻ばうひ学びの人〻ゑどゝしくより
ゐなぎふ下なやむめるをいうでそれゞ道引
ともゞ形として此ごろ出いでる書ゆり紫式
ゆやことだの錦を何とゝやいふゝ形りそれ
もいうきゑふつゝり出んと思ひめぐらして

扨この名言紀立田姫の糸紀糸又ちく抽
ゆゝぐゝ也ひとりて抽しるなり仏ゑと
よ紀書う形と足もてゆゝふ桐紀おより
ちゞめ夢の深樗まで巻〻の言葉いろ〻
きゑゝこと紀う言紀そのむゝ〻ふゑちゑけ
て大ゝゝ多ゝハぬるなく ゆつ免紀いでる

ふなん何わけるそハ袷 袵 何ゑハ袖 何ゑハ帶
袴などの料と物ゝ記もあり多ゞいさくら
なるさいでめ紅るる無何りうちまきてわゞ
ゑめ〳〵バや大ふ多てと古ことふいひまん
やうふも〳〵つゞけるも何り内藏寮 遥 餐づさ
などふおゐやけ〳〵 まうけ〳〵ねるもかくや

一 し書はやむ〳〵し言葉たきをすねゐて文かくむと
すふう ゐまねびの人ものちけるめにをさく こもけせ
けきばつねゑ文かむゑたすけとふるべくねぼゆふ
事どもをばおほるもらすとふく集めゞぶせり
ものの社どもし書ゑあためゞぶせふことばどもをは
なゞ〳〵 已ゞの文にゐり用ゐよとゑあゝべし書
に集めゞぶせはことばどもによりて中むゝし言葉
ぞゝのゐをくちなまて雅言けさ玩よくわさまへ
てこれけせよとなりこれし書たくまる予ゞがんざし
ふゑすべく文かくむこゝろえどもハ別よくはしく
ものゝ社さきもしれぞこてにきいきびれてこけ書ゑ
集めゞぶせる言葉ども源氏物語ゑけこかざまるも
中むゝみ文とばものゝ社さしものゝ言葉ふぞのゐに

もくもれかけきばぞこのし。

一言葉をぬきいでゝ来るやうたとべきゝとくごりれ文の中に春秋れことばうちまじりとあるを癖雑乃ことばうちまじりをぐひきいけきまれことばれおほきかりけ。

一口季の詞乃中れ歌をたほうこ歌の歌をあくむり。ゆきば物語乃ることにてを。冬れことばかるも歌をむかしく秋詞をとれるたぐひのまこれありどちるべし。

一癖詞を歌はまうけがこきゆ意あるにようてをべく歌をまうくるとなし。これ故をものごりふみを。よくくみをくゝむむとたのぎゝちるべし。

一雑詞をことばのようくるまゝにとむかくも歌ふまうけつ面かごのちに文字をえゝびかどするとをなく。

次にもかくはらばるかつとをぐ文かゝむ人れかやすこのらむやうにをとをとめたり枕まる天詞地詞あど

にちに季詞をとめ詞いれることばをまをまをちゝる出

さまほしゝさこのいとあまるこの里をこのれどをゝれれを。

口季詞をゆばりてふをゝひゝぐすとかしさをど。

まれををやむゝとをえびしてことをかゝことをふゝてび

いぐせるをすべてれ丹ををかきにしもあゝば。

一本文を師の載本をもて校合（コウガウ）へ云し出のれるを

によりたまばよりつねの本をを異（コト）かるおもれほしう

ひまねびれ人あやしふべゝうゝび。

みれをとれ稲彦いふ

紫文蒙錦一卷目錄

春部

初春一　子日三　踏歌同　鶯五
春雪六　餘寒七　梅同　柳十三　霞同
春夜十五　春曙十六　歸雁同　花十七　春月同
藤廿五　暮春廿六　春雜同　山吹廿四

夏部

首夏廿一　新樹廿二　若竹同　郭公廿三　夕貌同
橘廿四　五月雨廿五　螢同　夏月廿六　躍麦同
水鶏廿七　鶴川廿八　夕立廿九　納涼四十　箒火四十一
夏雜四十三

紫文製錦一巻

安藝　源　稲彦　撰

春部

初春

初音ニテオ
年たちこのゝるゝあふれてゝ雲間なごりれく。
くもりぬうらぐもさにきぬかすみぬのきねのう
ちだゝ。雪間草。わのやこのに父法はきろめぶた
しのぶけしきぶたこのすこに。本けめえぶらはつり。

れば。のこ。人はせろ。もの。び〜。の。ぐ〜。ゆる。の。し。
る。て。い。と。ぐ。ま。て。ば。し。け。る。れ。ま。を。ま。は。よ。り。す。ど。
免。こ。ば。こ。ろ。れ。ば。く。こ。の。き。ま。し。ま。ま。（法師方〜）
け。あ。り。ま。こ。ま。び。ま。て。ん。を。こ。は。ま。た。る。ま。じ。
く。あ。も。春。は。れ。と。ど。は。れ。ま。ま。こ。り。わ。ま。て。梅。は。香
を。み。ま。は。う。ち。は。匂。ひ。よ。ま。き。ま。ど。の。ひ。く。い。は。ら
佛。は。御。國。に。れ。ま。ば。ま。ま。す。ど。に。れ。を。は。け。く。や。す
ら。の。に。す。こ。ま。し。ま。く。ま。と。
ロウ
。て。こ。の。こ。と。に。ま。ま。に。ま。は。く。ば。ま。ま。ま。ま。ま。し。
（藤原）

現代語訳にゴまま
をもいはるるよとせけう
げにすまもと思へば
あ。こ。の。ま。の。で。は。ま。
を。は。て。ま。ん。ば。ま。ま。
が。こ。る。ま。ば。ま。年。八

く。（餅）そ。ち。ひ。し。か。ど。み。を。さ。く。ま。ま。ま。ま。の。び
に。ま。る。ま。ま。（細流に四年いまもまもじ今年はは年はちちまこころのごとし）ま。ま。ち。は。祝。ま。ま。え。し。て。ば。ば。
ま。し。あ。る。に。こ。（云）
（内三十才源氏君の河）
。い。ま。ま。ま。ま。の。ま。る。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。の。
れ。こ。ま。お。の。く。ま。れ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
す。こ。し。き。の。せ。よ。や。ま。こ。ま。ま。ま。せ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ひ。ま。る。ま。の。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
に。み。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
き。こ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

かぎりなきさぶらひけるにやあまたくすしみいのりを術たのみ
けしきあはれときこゆ。
昇光かへりぬるらしこの折るろしおほやけとまき
うありさまをもはじめてまたくみのきこえあしさまあ
なる御(おほん)よろこびまゐりけれどひとあつめる人おほ
とおしきほどにはた七日は御(おほん)よろこびあらたし
まふことはまことあへりわこのやの折ることなみまたも
なくさうらよけれど見てまゐりけさくのひとも。
ころおうちまゐたまふところやあん。うはく

紫一

早蕨は気色を見すて
て行く花を云ふ又所
を経ておもへる也に
たのめの常世にてたよ
あらぬとハ云ふ皆
人の様なれり。

そばらりこのにみゆるころはひらりりのし。
早蕨のたいまならむつゐあまきさおほどちゝく
侍るまゝに花はきどもれ気色ばおもてのうちゆくの
しく峯はのすゑはあらはれ見ゆすゑもしき此
みおなかれこよなくだくあるぬるたびまゐりくいのち
はじめいくひさわりはまし侍ることとそうなれど。
よろぼけはてましくなひとけれだもひあらのし
くらし給ふ。

子日

初音 四十オ　今日は子の日なり。

ていそくむまつとわりなる日なり。服君は押方に

（氏君のし）わかなつむへれぞ。わらは（童）もぞ（下）ぞ（仕）へるべれる山

せこ（背子）ともしこしきあうぶわうきゝへぶれこそ。

（無き入りしさまと）わきぎこうれくるんゆ。北れこどよりわざとの

まゝくもあけぬ（鬢）まゆ（眉）はこ（籠）ぜゆ（櫛）こと（櫛）ぜ。

うど奉まゆ。

まる賞元れ。れふころあんのし。

踏哥

（男踏哥十四日。女踏哥十六日。）

（下れ文八男踏哥せさまし。）

四十六オ　今年は男どこ（踏）ぶ（哥）のあり。内より朱雀院に

まゐる。みちれほどはくて。花れあけの色

になりに行。月れそもりゆくすこまきりく。

うす雪すこしふる庭れえるゝぬに。殿

上人なども元。女のく上年れほるこうぶ

にくふ元れ音元。とれもこうくふきたて。北（花）

れまへ（紙作前）ろこと。よぶぞうひこ。

四十六ウ　かぜすきるゝ（暁月）夜に。雪いやうくふり

けむ。松のぜこぞ（ぞのくふきれろし元すきま

じく元ゐ（白下重）ぬべきほどに。あを（青色）ばうたまくばの
はるよ。ゆ〳〵しのとうまれるあしるにのこのざうのい
ろゐる。めざしけるこまにをしえまきこ拾ゐも
ぜ。所うゝるやたれもーろくぶゆき。のちはぶ
はほどゐり。

月十七日オ

。はぶ〳〵と明しくよ。雪やいちりてぶろさ
ゐきに。弁川（種ヶ原の話し）うゝしく。のよれるすぐ（舞堂まとり）なた
のしきこゐ〳〵はぶ張ゐもきゆめぶ〳〵ゐ
うゝぶちをし
けゐ。

。はぶ〳〵やたて。のしきあさぶゝまに。ゐとく（新）
ひみぶ社ゐるきこてだゐ（神子にゝ西）ぶゐうしゐ
はほどに見社ぶ。ぶうちは大蔵（オホイドノ）は君達（キムダチ）四人
人ぶゝう。殿上人は。のよ。ゐ。すぐまが
たちきよぶにゝ打ぶきゐるいゝあぶ
ゐし。

鶯

衍川（ヱヤウ）
ゐまゐ人ちこのきこ若木は梅。ゝろ元とゐくはた
ぼ（ほゝ高ゝゝイ）みゝ。鶯はゐ。ゝ元ぶおはとゐる

に。云〻

霞

（美濃四丁オ）はるのにかすみわたりて。方々樹ごとはのと
あらはれわたるほど。為よ（俗氏書付）いとよくえに
もかるこのれ。

（四八丁オ）○日元にしるしのきにつまくゝあまぎぬ。ゆふ雲の
いとゝのすゝもとるにまぎれくゝのはしばの
きれゝれるよ。立ぐたまふ。

春雪

（推本七十ウ）くゝれたるそまぎ。ゆきいとゝ。えとゝぬづう
侍りと。御（オホン）どこゝれ人こゝわつくまこゝ。云く
（浮舟廿五丁ウ）○京にも京まつばうゝきふれうもとるゆき。山
ふのくるまゝ。やゝ。ゆりはみて。常ようを。
わりなきこゝれのにほうみち。ゆゝわ行ふにはぶし。
御（オホン）ゆゝ。えれ人えぶなきぬぐうたうゝわ
ぐゝはすきこゝ。ゆゝ。ゆくれたふ。
（四九丁ウ）○雪ゆゝ。ゆきてるに。ゆゝすもゝ。ゆゝ。
ゆゝ。雪ゆたくに。木ゆばゝうゝゆ。山を

ま城はれ木陰は黒に
馬いあれどごうちとり
ぐくる君を見ひみ
ね。

かごうをこのけ雪るやうにぎらくくはげ日ふのや
きみるにのよべわまくーこちれわうまさる
どあはもたほまうぐへくるうれ紛ふ。

白文
峯は雪汀はとほりふくわまて君にぐまぐふ
道をるどはぐぐごはれ里にらまあまでる
ぐあーーきすぐあーいでぐ年ふくーた
まふ。

浮舟
降りみぐれうぎはるこほる雪より元行る元
いてぐ吾をけぬべきぐこのきげちまう此中元を
わぐぐあ紛ふげみにくくえこのきくけるのれやば
げこのうくてびきやりけ。

餘寒

早蕨五十ウ
ろはは雪まる已元まくげまぐ白文共北玉長共義主新古ふりげまえ心し
すくわれるよるになりてばあーーう姫き
いげるこのぜは雪氣餘寒まぐこふの紛きくくいを
きむげよ。わたは大厩油ぐーえるぐーーこ。

梅

末摘花卅六十ウ
白よいぐくうくこのれるにぐけーーの口ぐかすくく波

まる梢どもなり。ぬきゝ中にも。梅はな
しきばかりにほひ。あらわるゝ。ひとわきてゆ
ばかりしかぐはしく。色こまやかなる紅梅いとくさくさくなし
いとく。色こきにあり。

初音十二ノ
○花は番さうふゆふ風のどのにかをふきたる
にはまくはうめ。やうゝしひえぬきてあしたこうばしれば
たうの。時をとりつゐい同
ゝまどきさうるこもゝ。ぜんもろく。
催馬楽の三ノ
こはさのうちでたるしやうぶいと花やかの形。
同十三ノ
うあれはるるはなゝるあけまどのすゝ行をあと
ゝろはけそひもこぞのにくはまへはは木だち
ばのりぶいとわたをゝろく紅梅はさはいでを
ふにわしるどみをやすへをあはを奥へわし
紛ひく。

源氏君
ふるまゝはは東はこずふに暮きゝよのはまあゝ
ぬ花を見るこの邦。
梅枝四ノ十
○きはゝどは十日。雨すゝふりくはまへうこの
ゝ紅毒さこのりにはいろをこのを。似るをはあき
ほどに。兵衛督
つはは文わゝりをゝ。

○朧月(ロウゲツ)さし出ぬまこと犬も御酒をのまずあひて昔
はるのおぼろなるよし。のすめる月は秋の夜。
にくき哉。雨はおぼろは風すくしくて、花
はのあはれのしきに御殿はおぼろはあるわけしもなし
白じみよく人は御ところちかいといへんなり。
○やどりて見いだししてば、しちゆくおもしまた。若菜上四十六丁オ
あるき御衣(オホンゾ)ござなき紛ひて花をすのさくの緒
ひとし友まろ雪はほのくみ残まるらんに打
ちりちるふ哉、氷あつり、賞はわのやのまちの

朝顔巻八袖よりにほへるはそれ也まことに鶯もなく

き紅梅は末に。うちなびきる近き袖こそかに
へと花をひきよして、ぼす打しあけておのが
見あつるさま。人は花のうる人はおやにく。
おもをきくちと見て紛をあずわかのうながめ
うしき御(オホン)さまなり。源氏紅梅さきし御さまし
○正月廿日ばかりになりむまじきぞよう。花下廿六丁オ
ほどよき風ぬるくやきくおまへは梅きさかり
になりゆくおほうきは花はきぶこもへ。ごゆけし
きばく。のすこわりになり。

○四十オ
○少あるたうのまできれうしよりぶんまこと
れふる雪ぞ花をしひでらるれば枝えたにもゝば
ようりさいれみぶれもとりぬゆらぶうにうちつく風
にえるまず匂ひまるみちからちれのもも。
ふきあはせ〳〵。雪さとふにまよしけべく。
いみぢきれぶれ（印殿）あるうれ白ひるり。
○月やうくさーあぢるまるよ花れ色ものも。
てはやされ〳〵ばいふてらろにくきばまり。
○これ東れつまるぬきちるぬき紅梅れ（紅梅九十オ）
○九

君すべ誰にもせんか、

風れいろるとまも
イ梅ぬぶ。のぢこと
くにこはぶはん。

更しまく匂ひまるまをもひくく。（文花作法）
の御前の文紅梅大臣の
れ花ごろばつあるくるゆ光り。兵衛つれ
うえうちにれをするり。一枝をりてまるまく。
まるるくぶまるよて云
○これ花を奉まる（日十二ウ 紅梅れれ考しく花へ）ぞうちまるくぶ（古まし）
るゝまるゝのばぶく打えれのぢりむず。枝
れさまるるぶさ。ろもこの色よれけまるぶ。
（自文詞）園にまほうへる紅れ文にぶれぶ。まるなむ
しろとき梅ぶまたとまるとしるめるをぶ。いれ

このごろ、うゑまぜさせ給へるのはいとう。
御こころざしでめめしくる花なもぞ。うしあうて
もてなし給へ。

竹川十二オ

○はよ日はうの梅は花ざかりなるよ。云こ
○はとは新春人は少梅に実入
○はへやまぬもぞ。いざまうでゝ
まうさんとたゞ〳〵ごてぶきはまして。こし
はうるどはくしまする。紅梅は木はやはま梅の
絵うつふきうつ。やちちるはちの花より
もまうるぞ。ざとうちるほ(ま)ぞはまは戸れ

しあけてあぢまをつとよくこのきこあはあるう。
早蕨ニウ芽
○さうはは御ホン
ことのきこまるしはけ。例はけ
ろよの世まるる梅はのをめでれたまるまつぞを
れ。をうてまるりたまうる匂ひはいとう
んるめでまうとき花は散りおうらおばすて。
白ニ
をうる人は花のよう花なる(ま)やをまるまいず
まうまにはへるのうまうまるぞ。
薫君
みうる人にこのごとよまうる花はうをんして
こうは散るぞうはは。わぞ〳〵うくをたそぶ

まこのはしもあるべし

ねまへちこのき紅梅はなもこのもの

にうくひすすぐに鶯すぐ

てわかるめまこぎ

ぶたちはなはまごうまをうあ

きうこのしぶはなぞいうるよ花はのもま

らうとはなはの句ひもとも花をねどむ

たえしゆらうはまるはなくのすぎう

けうまもせいうきうぐさめにもぶさぐめし

（ハ十一ウ）

（オホン）

聞きやの女表
やはりはきい

さはきまるはなぞ
たちぶはのまをあ
ばう

えてあうびもまもはをるぶはぶまあまうたま
へだ。

みるへえあしはまうふ山ざきに昔はが
ゆうぶはのぐするぶふえるぶはのこのよく。
たうぐ宮しうぶ式。（式部はし）
て。

（蕨君）
袖ふまし梅きのはうめにおひよくねぐめ
うはうのやどやこうるぶ人数をみぐをさまま
くはぐひうくしてぶ、おはようさえあ
ぶ。

（千載六十一ウ）○梅やはれはまちとのき紅葉はなとの色のはつ
ぬをしまやむすはれはしと花とりもこ社るこ
ろよ世はあるを。あこのぞうしまほしはしみ
にあるいにや枝ぶにあこの手てまをしこ世と
まふ下ら〳〵はれ尼はすこ〳〵わのさこのあふ。あ
しをく花をすまを。ぞこのこと。かまくちい
ふよいとこまをひくまを。
（千習四）袖ふまし〳〵人こうそてね花はあるまを。のれ
まほふまを晴。

（賢木四十四ウ）柳
こけわ〳〵る池はふ岸はは柳の葉しき
ばこのりをは緑わすまぬるこどさまくるのあ
らまを折ひく。云〳〵
（椎本四十ウ）はるぶくれこのすこわるるこ
あまぞ。今ひ〳〵をうめるまを。いろくみわを
さこに河ひ柳はおきーまびくこぞ
このげるどはるこのまぶたうきを。（白玉をよす）男人な
らひ折こあ人をいとあぞしくみまて

ごのくしをおぼえぬ。

春月

赤摘花九十オ

しさけくるまにのうく月れたのしさにはだに。
雲のくもきるみちもはるばるとぬきこめさせて。

大殿（オホトノ）にれうの月（頃ノ十三十オ）

○月れそろにさいでぬ。池ひろくやまぶきの
きわうぶばうげよみゆるよそすこはるまき
きうん。岩ほのかのれぼーやらる。

内上

○あはきうへる月のげのなまめかしうさ。

めやうのあるよう。源氏君つぐ

ほれをれまるて。いとえのびやきのよつはへだ。
しねぶりのでくやがて月、ぜんぜんわるすす。
まこころる沖をれがるれはじにこのこと
ゆうゆりよけるを。

侍合せ十ウ

○世宗日月さいでくまるこさをも

らすぼ。たのまれ。月ぜんぜんのよ。

廿女四十九十オ

○月ればろまさ。空（イテ）たのきはじめ。れのじ

まのわろよ。ろすこ。かづ月と次どもれ。

て。おほはうあそびぞやうぬ。

若菜下卅三丁オ
○月こゝろもとなきほどなれば。とうろこなたかなたに
かけて。火よきほどにともさせ給へり。

同卅六丁オ
○秋ふけゆく風のけはひ。ひやゝかなるにのふし
まちみし月。はつかにさしいでたるこゝろもとを
なしや。

竹河卅三丁ウ
○月も秋のあはれなるまゝにひかりまされば
しきをあふぎすこのぼりて。云く

早蕨十六丁オ
○七月かの月みさやのまをし山をはてきのげだる

しく。かすみたる鏡見あはれぼいとはきに
なゝはかうくるしけきとそむゆめまし
て。

中君
なこのかたを山のはいでゝゆく月こそ世にすま
わびくやまにうしま。

浮舟卅二丁ウ
○よいまちぶろの月秋よ。すこしき
ちこのくぬしてあつめいぶしかつり。

春夜

須磨七丁ウ
明ぬまで。秋のよ出なふかへて明ゆ月。いとおはゆ

しうぞ花は木ごとえやうくさこのり色ぎくわぢいの
ゐる春雨のぬれぬ一つき庭よりはるく春
わうりそぞこはのれくこ庭あひく秋
は和のあそまにだかく中ちまりをすこ
はきまのまはこのくらんるれくこばうれ
ごめ約ハ四約言はきみ夏春つれくも
にやはまだれあけてゐそり。
○月きさいでぬまだ花はいろさぶこのにえみ
夜裏葉七十オ
えぬほど紅をそてあそぶよ公をとよ夏く

れほみきまゐり。えあそびしあ。

春曙

春曙十八丁ウ

明ゆくくそいとうを庭くく山はとり
ぢえそふそこはのまくさくばりあしをり。
名をもゐ女木草はどえ多くにちり
まづとすきはゆるにしのはた
きずこありくえめばしく夏ゐるなや
まこさえすぎしれをそめ。
○あけはるまくよ花は色えくはは御ゐこち
終合廿二丁ウ

はるゝ。ぼのゝに見ゝ。鳥はさ〳〵だるほど。
こゝちゆきめでたきあさぼらけ。春なり。

帰雁

須ナ四十七十オ
あさぼらけのゝ。雁はなくわたる。あるはきみ。

ふるさとはなほ。まれ。まれ。のゆきくゝもとゝ
やまのきゝ帰るのり。金宰相さまだちいでゝ
こゝちせゞく。

ひ中将
あこのゝくるゝ。はれさとよきたちわのゝ花都

りみちやまぞはん

花

塔詩二十九
三月はさゝ〻そりなまぞ京は花ざかりをゝらし
すぎにゝり山はさゝ〻まぞさゝのりいでゝ
えてはさまるまゝ。霞はさゝずまひえおこし
う見ゆまぞ。のゝるありきまえゝひ紛さび。
はゝろゝ花都身にくめぞゝゝだばされ
けゝ。

花宴十二十オ
○花ざかりを。ゝに去ゝ飛はちりぬゝ成

くまもとけむぐれてさくさくこ木ぐ〳〵面白き。

○すまにて年このうくぐ日るぐくたまくくある

にら名〳〵若木ぐさくぐぼのこのよざ北ろ

めくぐぐ北条ぐらくこのかるぐろぐめ

こと北ぐかり山ぐらまくぐうちなきかぶをく

れおこう。

○二月廿日あまぐぶよ〳〵年京をわうもく時。

ひぐるくこのうしく人ぐ北市ありさまるぐぐと

〳〵くくぐ南殿のさくくも盛りになりめくんぐと

年北花のえんにぐ淀の御条色。うちぐらくぐ。

いときよくくよ。ぐまあくくわぐのたくまる分ぐ。

ずく紙ひくくも枝もひ出きくくるぐ。

いたくるく大今ぐ人ぐ北高くくきるさくくこのぐい

今ぐ日毛きにくくう。

○うかうこぐ北れまくぐ山ぎはよりこぎいでぐたまる全

いたるほぐど風ふきくくのぐ北さくくずくくう

ちくまるまのふぐいくくくうにてくまくく霞北ま

よそちかいでくるまでに気になまめかしてこそ。
藤裏葉三十丁ウ
○夕のあてなりしのこりあふしはなげし。花やかなりしもち
内大臣
みだれて。雨夜たど〳〵しきにならひむこのしおぼ
しいでゝ。なまめかしう。うちゑみきこえたまふ。
若菜上九十九丁ウ　夕きりの君也　柏木君也
○大将殿。のむかひきみも。みなおりあひて。えなら
ぬ。花の蔭に。さまよひあふ。夕ばえ。いときよ
げなり。をさ〳〵。さまよく。しづかならぬみ
だれごとなれど。所がら人がらなり。蹴鞠のさま
同百丁オ
○故あるかゝりの木立。いたくかすみこめたる

色〳〵ひもときわたる花の木ども。わづか
なるもえぎのかげに。かくはかなきことなれど
よきあしきけぢめあるをいどみつゝ。われも
おとらじと思ひがほなる中に。柏木君也 衛門督の
かりそめにたちまじりたまへるあしもとに。なら
ぶ人なかりけり。かたちいときよげになま
めきたるさましたる人の。用意いたくして
さすがにみだりがはしきをかしくみゆ。
上にあり

○みそれまつあるさくらのげるよりも。
ひとぐ花はうへもわすまてくんよまさる
（朝にんをいとこと）
おもかたぐ見えず（寅氏君し）（寅氏君し）
佛らむぢ。こらくある仏ぢんど見て
て。のずおほく句りゆくみ上らくえこだ
きくぷくりはひすしん作くぎ
さり。
○（日ウ）をれの雪はやうまりこのまバうち見あ
げくちはまさる枝すくわしをうて。
（夕寄君）

みそれ木はしの仏のほどにねさまひぬ（柏木君）このん
はきこぷぐきく。花みぢりごそくちるあり
や。さくをよぎてくるぷごのまひけい。云
○弥生は十日あまを花ざうまて。ぷは茶色
（序法五十オ）
ぷどえらくかよをうわゆーろく佛はたち
するるゆころは仏ありさるぷほのくぷおとひ
やらまくぷくるふのきくろもるきん（ほどて）
さくぷくりは仏ひたぷ。
○（日ウ）ぷるさくこうちあはをそくぷごこのよを

すぐ〳〵ゑをとこぐ。おすゝ〳〵ぼのく〳〵。
あまゆく朝ぼらけ。霞のまより見てを
はな花はいろ〳〵なほまに心とまりぬべくに
ほひわたりてをもしろがり轉(さゞ)ゑぶしれ
まにだとゝぬこゝらしてをけあるれを。
花ゆゝろさえのこゝぬほどよつよゝわ(陸王)
れ辞(ことば)てきゝにるほどろずゑにのるれ
がくぼるやこのにぶぎはゝくきゝるゆるにゑ
人れぬぎこのまゝるもけゝゝるゝるどを指

れをりこゝにたのゝらけゝ見ゆ
○花(幻二十ウ)をほのこのにぶけきけれたのゝき
ほぶゝれをほひまり。
○はれれの紅(はゝ七十ウ紫上れ遺言れる)ゝのばとゝくたいのたまゝくれ紅
梅いゝりわきゝゝう(白えのゝ)ゝみあるき紅ふを(深紅)いと
ゝ(君れゝ)ゝ和上ゑをとてまつるふぎけゝどにまゑ。
ゝ(君れゝ)ゝ
ゝれのゝのゝどゑれをれさゝのりにるゝゑをまぶゝき
ゑ。木末おゝのゝう震ゝるゝるにこの(紫のゝ)ゝ法(十四)う
ゝゝみれ紅妻にゝ。鶯れゝるゑゝやゝのゝゑきゝいで

たましゐだちいでゝげにもおぼゆ。
（源氏君）植てみし花のあるじもなき宿にしらずがほ
にてきゐる鶯とうちずんじありき給ふ。春深く
なりゆくまゝにおまへのありさまいにしへにかはら
ぬをめでたまふかたにはあらねどしづ
こゝろなくものごとにつけてもむねいたう
おぼさるゝ。大かたの此世の外のやうに
どりのねもおとせざらん山はのみ思ひ来しらる
ぞいとゞなりまさりたまふ。山ぶきなどの心ち

よげに咲みだれたるもうちつけに露け
くのみ見なさるゝ。外の花は一重ち
りて八重さく花ざくらさかりすぎてかばざ
くらはひらけ藤はおくれていろづきなどこそは
すめるを、そのおそくとき花の
こゝろをよくわきていろ〳〵を尽し（紫の上）植お
きたまひしかば時をわすれずにほひみ
ちたるに、（匂の宮）わか宮のまろがさくらはさきに
けり。いかでひさしくちらさじ木のめぐり

紙ほそにおほふ
かりそめ袖ぶくろ
はなをばかりの
せじ。

仁木下城主ぶくろ城あるじ。掘元
えつきよりどの。こゝろおもひえまとり收
れ、もしくの紙ふかほのいとうたくつきに
元打（原の五郎のこと）あるの奴れしほふぐろ付袖元と
めけれ人よりおもいとこのこゝろだがよりも
ゆうまどせしきみだり城ぐそてあるび
に鬼奉ものふ。（源氏長谷）みよる社きこゝんこと元。
殘アすくすやゆ命といつものゆまはば
かけらふぐくと元鬼面をうあゝじのし

ゆくゝ例れ泥ぐこと鬼（ま）ぞいと物じゝと元し
てぱれのあひゝこと城。まぐくしうれた
まふゝくふ。めよまりて。御（ホン）ぞれ袖をひ
きまさぐりあぐ仕ぱきこゝはれ
ちひ。
○あこ（四十十ウ）れのゆふをしてゆと面白く見ゆ
まぞ。まにこゝろよせりしく人なくて花
れ色元ぞきまぐれこと鬼あさる城云
○やよひ（竹川十四十ウ）まりてさく梅あまぞちりのひく

えりぬれかすうすけ盛ゐ
○月遠き花のあるうしを法ぬ
らしく行ふ風あるこの吹きるゆ
まぬ花おつるこがことはをしうあて
しけまじぬまぬ所表
員方の座君
さそしゆ風よころけさわぐのれれ
くまるさ花と見ゆ
推木十七
○花盛りて四方社毒あるがめやるほど見
毒あるぬれそやまれそ哥どえた

ほのまどうるさくて野ぢきあり。
早蕨十七
○花ざかりけはじ二条院さくら見
やつとあふ
宇佐のみこ
宿れいぢぬぢれもひやら
社行へぞこころやすくやまどいうごちあ
若文社はかにうくるけ君のまりのつこ
まりて文社沸元正にまりあり。

山吹

真木推世十七
三月になりて六条殿社沸前の藤やまぶ
きけれそうるきゆぞを見ゆよ法事
て元まづ見るこのひありてゆるまり
玉のたまのまし

めさぢぼ
筋のさろ花や
すやに風にちる
らん。

根よりこそ心を
ミどり山吹色に
衣を染てうつき
め。
此ふざれバ並べける
よ白きるけり。ほ
に見へ侍いわす
らましすくに。

御(おほん)さまのこれだがし出しるまでまちれたる人哉
うちすてゝごなきにわつりて御(ゴ)しむず異行
れまゐにござゝなうぞ抱やうやうるにかし
いとにやしやし世に衣をまとのきまひ。
須武(こもりく)なるもはずよみでかまのみへる院とわるぞうず
こふる山おきのを行(しか)のぼるよ見て行くおめ
まよへそきくく人なし。
○哥(幻十丁ウ) いはまくれ山吹しけ杁をすく身て ぬなれ
れさるなるまじかされたぼききまでよしね

たのうまだまだれきつぐざりける花よや菊ん。
花やあにみぎはしきこの有やくいと面白き。
えけすまんありけるらきへし人あきさ最とも
あしずしのぼまなく俳はまりも白ひの紀ほ
たるこうち翁よ侍ま上のこまふ。

藤

(斎真覧六十ウ) こそれまぬやこにむべしうき御摘おすうもそず
(花の御きのつまり) こしばこのりまで。花はけうまうほうかひぬ姜(奥)(一条大臣)
此花ぼかしまいとなくろれにし黄にげる気こと

にめたびろ。ぬきたまれそぐこゝろうじのくぢち
すてゝちつもぬるがらしあしらだがゆるころ
ほひ。紫（菫）きんのひこり来もちたくなく。夜に
されのるほど（ほど）あん。あやしくこゝろにく。あは
走にたばしきぐるよ。色もえん。なまめし（紫上文にまき上へたてし）のしき
ゆのりにえし。けぶりしごくらちほくもるたる
つるげしきみぞくよ。はひきよげなり。
○（同八丁）七月廿夕月秋。のけかはのうるに。いとあはれのでゝ。
はぢやうにふかすゑわすりげよまぶしのゐる本

ずゑどもれ。さうくしきこゝろなるに。いとくらう
しきずらよこたはる松のこずゑさばかりに空
あるをかぬる藤はさぞよの常ならじ。
○（竹川廿八丁ウ）又藻に。藤はいとおもしろく咲いのかゝるは。
水はほとりの石をば苔をむしろに。（○黄鳥の）かめ居き
アつり。

暮春

（若菜下二十ウ三月廿日）しふにいちむる霞のけしきも。あはれうつくしく
えぶるゆふ風よもの乃のけ。いとどをいわずやす

かゝで。ゲ〻

春雜

花宴二十六日

いとよくはまてゝ。ゝれ之事也。ゝりれゝ冬之ゝて

ちよげ大なる花。そ之ゝ

胡蝶二十日

○やよひ。ち川之のあまりれてゝろほひ。春れ御前乃紫上

ありさる。汚れよりゝに川ゝしてゝるほゝ。春の色。

ゝりれゝ。ゝ。ほゝの井里ゝ。まゝゝりぬゝ。ゝ。

げゝしう。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。山れ。ゝ。ゝ。ゝ。

色まさるこけの。ゝ。ゝ。ゝ。紫上の方の人〻

川かゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ふねれゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

船れゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ゝり行つり。秋好中宮

ゝ。此ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ゝれ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

紫上の心

此ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ゝれ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

源氏君の心

ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

秋好中宮に

れ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

び竹ふべきなれば。わのきこ女房ものも
めでしぬべきを。船にのせ竹うて。南は池をこな
たなるほしかなとなる竹へるをぞらひさに山
をぞへてはせさに見せこれどそれ西のさ北より
こぎまひくぐひんがはりどのまこなるはわの
きこ人ぐ。あはめきを竹ふ龍頭鷁首をかくのよ
うひまことくしくもぞ。ひてがぢぶりさ我
はすわふはぐ。こまなみげらゆひくもろこうだ
たせく。さるたほきなる池のなかにぞ出きる

まぞまこらはもくぬ國をぞたんこうもうて家
にはもろくぶ島はうこれ岩のげまきよを
て母きまぞぼのなきおはせくずひえたぐ繪
にこのいくうんやうたなりこなるこかなこ雲あひこる
桂どもぞにこきをにわるせるこはるべはのこ
るぐるかとほんやらきて兎をまたる柳えぐを
たまにる花をえうきいるぬ匂ひを嗅らきり。
かいさかりすぐさる橘も今はいりこわこあみ
廊らうをめぐれる藤の色をこまやのこひけ

ゆきながれて池の水に影をうつしをるやま
吹きしよりこぼれてみぎはにのぼり水鳥ど
もは浮びをるはなまじりあそびはべる一枝
ごとをくひてはひちがふさしは波にあやぼん
をまじへたる形ぞ色もいとやうにをかさりてま
ほきにまことにをかしくえもいはずはべりつれひ
はべり日をくらしぬ。

女房 蓮
風ふけば浪は花さへ通ひてこや名にたてる
山吹の花

日 春は池やみぎはの川瀬にはようかんとし山ぶき
そこをにほへる

口 花はいつは山をたつねし春はもちに七せぬ名をば
こゝに残さん

日 春は日のうらゝにさして行く舟をさをさしもくも
むぞ哀なるなどやうみぎはのなるうちつことしをんこに
いひのちはことの外墨をわすれぬべうわくのき
人ふれんをうたはまたにことわりなる水の面になん。
皇 くれのこるほどまわらじやうさいふかくにかゆしろく

きこゆるにんにもあべたるのようにて木
てれうり。
○寄れるうれ（ハ丁オ 繁七）部にんぎょうに佛に花たてまつりて世行ふ島
蝶なれうぞきわけるわらべ八人がらなべて
ことにとりはへさせ行ひて。島にもどろかねのそれ
がめて。樒をさし。樒ようまこのねのこのあに山吹をお
なじきに花ふさとそのめうせてなきに匂ひをいく
はせのつり。
○やよひ（ハ丁オ 繪合十丁オ）十日ほどなまぬるうまえらにて人の
こゝろもものびやかれもろもろなるにこゝ
○年（ハ丁ウ 雅本世九丁ウ）かぞりぬまで空はいとさらにかなるに行
れ水とけわたるにはなてえがらまでなのべるを。
ゆるびてくえとなるめ行ふびどりれ坊より「雪ふて
に橘て侍る所りとて沢れ行。岸れわらびなどを
ひたるつもるの御（ハ表）臺にまるまるを文につけてをか
かる草木れ筆毛にもさびひて行うふ月日れ色
を。見ゆるうれたりてれなど人ふれいふを行れお
かしきなんとをこて行ふ。

大君
君がのる峯はわすれじとみまし　かぎろふかぎ
ま　まれもる　元

中君
雪のあさ汀はこぞり誰ぞ　ゐてつみこはやは
んはやなのすてなどはつのなきこゑ　紙打　のこゑ
ひけ　明くれ　行ふ

夏部

首夏

蓬生十七十八
卯花きばかりして　ちるれはちるはをしむひとで
きこしたまひて　忘のびて　紫上
さいのらへに　御
さあそていでたまふ　日ごろふる　名ごり
あめすこしそそぎて　花の　ほどに　月は
いでさうむ　ありきれほ　いでられ
てえんなる　ほどゆふぐれ　みちはほ
よろぼのこと　れぼしいでれさするにかさ

こえなくあまきをいへばごとしとくも
ものやうなるをすぎてまつのはさなる
五月のよのはさしたのつまて月かげになび
きをもとるかぜにつきてはとほのみこの川の
しくそこはこのもなきかぜりなりたちば
なるはこのはりてはこのしたまをはしいで
たるへるたやなのぎをいとうもぎりてだい
ぢもさはらねぎみだれつゝさうもしこ
ちするこゝちかれこれはまをもとめ

常陸宮し文をまりけり、
少女二十オ
○年このはすりの文はけんくをもぬまぎせ
色めゝをとまりてゝうものへはほどゝ
いものゝきをむまゝてまつりけうきてれか
このはすりは家色、ゝちよげるに前栽院
にをゝ行きてゝうのめ新かれまゝこの
らはをゝ風をいのゝきにつけてゝわのきゝ
をゝおゝしのぎるゝをもあるゝ云々

新樹

一月天気和且清 緑槐陰合沙堤平

胡蝶 十九丁ウ

あめうちそゝきたるなごりのいとものしめやかなるゆふつかたおまへのわかゝえでかしはぎなどのあをやかにしげりあひたるがなにとなくこゝちよげなるそら見いだしたまひて和してまたきよしとずしたまうて云々

若竹

同 十七丁ウ

たまへちのきくまきみのにくわのやのまへひさしてらち御びくさまみなこのしきに云々

なき人の宿にかよはゞ時鳥かけてねのみなくとつげなん。

郭公

花散里 四丁オ

ほとゝぎすありつるかきねのにやおなじこゑにうちなくしたひきにけるよとおぼさるゝほどもえんなりかし。

蜻蛉 十八丁ウ

。たちばなのかをりなつかしきに。時鳥の二聲ばかりなきてわたる宿にかよはゞとひとりごちたまふもあかねばきたの宮にこゝに渡り給ふ日なりければたちばなををらせてきこえ給ふ。

（芭蕉）ちるはぎびとやきみをかなしみのあまりにしでも
たちをさにてこころかなるべ

夕貝

（名月、三十オ）きりこのあぐたいとのようなるかづら
けいらこちよびげるようにてまるいこきそだ。
たのをこれをうるはしけるをちか
たへみ物（モノヲス）ゆかぶとりぐち紙のをかに隨身丸
けいゆくいかの白くさいる城ゑんだのほどゆ
侍る。花は名をひめきくがあるきか

（法氏君の）きりにまんさきはうらをゆしけばよいと小家づ
ちにもばそうしまがるわらはこのをかはあ
やしうおよろづくもまくしこのうぬ軒
はつまるみどにそひまきそれるをは。ほをしの
花はちぎりやひとをきりてまるまをは
をもまへばこのれいあはまるへよ人をとるさ
すがよ。されをそるやうにはよきこるすしの
ひとくばのまがよ。あがくきすをるわらはの。
たのーびまるつぐきて。うちもくもくろ（隨身をし）

きゝ扇はいつこゝのたるまにたまにわきて、
まゐらせよ枝をまさみのあぢめる花を
さくらせたまきぶのどあまて惟光は朝
后はぐきてたてまつる。

橘

蒼苔里四十ウ

妨月は月さしいぢるほどまでとゞ木ぶのき
のもぶこそこぐらく見わたりてちのきた
ちぶ所のようをとりなきひとしく

五月雨

四十二ウ

ぶれの方をめぢしくさまたるせうま
にわたる紙ふ。

冷標十七ウ

○又月雨はけまとまるろうたるやけわさく
しのしぢるるてわがわたてわた
月紙ゝ。

蛍十五ウ方 五月雨し

○長雨例はけまとまるくてぢるか
月をまくけまとまぢ御(オホン)立ち。繪そのが
たうまぶはすきびてあのしそし紙ふ。

蛍

菅笠日記 十一丁ウ

小雨はふりて、いとかすかにしげりたる青葉の山
にむすびくる、ものきよらかなるやりとりての、
ほとりなるかたの、みむろの見ゆるなぐさめに
て、すゞの内宮へまゐるに、まいのぼるとて見や
らるゝ、谷の軒端より、花ちりことなる、
いとおほくゆりたてる火のともしあかう
ぬひあひてみるまく、尼君たちもはしゐ
でゐまり。

夏月

明石廿丁ウ

いとゞふけゆくまゝに、浜風すゞしくて、
つきも入がたになるまゝに、すみまさりゆく
こゑ、かへすがへすほどなく云く

蓬生廿三丁ウ

はきりわたるに、まりて、よしあるは、まどけれあき
たるより、きはるべきわたりのたつや見はへく、
軒のはまその、ころなりけるまでいとはるかなる
さしいりたるまで、あらはに見ゆるに、むかし
におぼしぬ。御ありしけはひのさまなどに、あはれ
草にや、そはまじたるやうへに見ゆるありさまにや

君が世にやそぢを
重ねむ、なほのこれる
まゝすゞしける。

[illegible]

びこのみのるを。むかしのごとくにぼ
ちもとる人もありけるを。おぼしあはせ
て。わるびさまにくどくみけるをあは
まこまり。

胡蝶 廿二丁ウ

○雨もやうく。風北行くまぼ[illegible]
にさいづ出る用のゆたかなる
を。しめやうるにぞ。

瞿麦

紅葉賀 十七丁オ

わまくれ前栽ふかくあをくさ
まる中よりこぼれ出る夏れたるやこのよ咲出る
を。ゆかしせあひ[illegible]

常夏 十六丁オ

○常夏はまくみどりのはすき前栽なりそう
忘草紅とぞ。[illegible]ぐ[illegible]れ色ゆかしたる。
このはやまとれまをいとあはのしく。
少ひるくさみぶれるまそいと
いみじうゆ。

水鶏

明石 十八丁オ

はるくと。[illegible]ぐこはるあきうぐ

あるに。中こまきれの花紅葉のさこうるる
より出。たゞうこはのゝとあうぎげまるかぎ
どこえ。あまめのしきに。くひあけうちたゝき
ゝくまで。たゞのかゞやきしてとゞあるわがゆ。
（後撰十七ノ）
にしへつまどるまで。花みすてたちうり紛
つり月わがろまし。ゆくゝいとえんある
（オボヒ）
ぬるまいぢきせぢ見て主まゐいと
ぢけくまりけまどちうれるのめあひ
けるさるまゞ。げどやうゝく。拘したた

まゝあちひいとめやし。くひあれいと
ちこのゝあきたるを。
（苓歌里）
くひあゞるわがろのさずきいのすてあ
きまるやどる風紙ゝまゝ。ゞとあたのし
うゞひけち紛つるゞどくゝずてゞ紛
世のれ。あるこうる中く身えくるゝけまと
わゞはまる。
（源氏君）
木あゞくたゝく水鶏るれこうのぞうはの
市る月えゝうゝまゞうしろめまゝうゝまと。

なほ〳〵に寒したまゝ。あゝ〳〵きすゝ
みどゝぎのほ。きぬ。こゝろぐるよきあゝぎ。

鵜川

松風廿二ヶ所

うこの人どこめ。たるゝ。あまあぐりおぼ
しゐらる。物語のこゝろ。かすり。

藤袁業廿二ヶ所

ひうけ池。毎どきらけく。ゐ。ぬし所の
鵜飼

うこのひけをさ。陰けうこひをめしあべく。
鵜をわうさせ。ちひさ北の御ど元
くひ。おもゝ。おぼゝれ八条。

紅葉賀廿四ヶ所

夕立

ゆ。ぎもしてなぐり涼しきよひもすぎれ
に。らんめいでんけわうは。ずゝありき
たまを。所内侍ぢ。ぬ。ぬしらひな
ゐり。

幻十六ヶ所

○夏月雨をいとゞなぐるしく。竹ふりは
このけしきをくさ。くしきに。十よ日月。は
あやこのにさ。出る雲ますのぎしきに。
大将殿君たまるさ。ぬし。竹小。花橘殿月

天ノ川、花橘、ほたるなどの色きこゆ。

耿々残燈背壁影、蕭々暗雨打窓声。

ひとりしてさらに入るしきの時の味ひかな

このあたりにいとき山はやのに男ゆるのをうえた
し、のぜまたこのうけまこぎ。月をあかしあるる
しるをせるんかまるてほどる。俄のうちち
いでるむ〜雲はけしきいとあやにくまく。
わびしくしうの降くる雨まろひくざとあく
風よざうの海えれ。ひまどはしく。ホくまん
ちするにまどは城うたて色るどめぢしか
ぬ。ぬぐと城うちずに行くえをうう
すや。いとの泊まるはせまきすき。

きぬいれぎまぢ
ぼ。

しるなり。

納涼

第六世四十六

きれこのみすくあらしくたのうきまたる人
は中河はわうるる家まんとはぐろ水せ
きいまくずしきこのあたてそぐるときこゆ。
つ人(四世五十六)殿はひんぐわまてしひあけまて。
このうめは沖(ハヤ)はひしたるど水はらぐん
るどざるその中におしくあるのうちぬる
この家だてしばがきして前栽をて

くろとぶめくこう高さより風すごくて、
うこはのとるきこもれくさくきこしぼこ
海ちげくとびまぐひくだうきほどの
巳ぶどぐわとどのより生るいげこて。
はぐきゆくさゆのむ。
常長二十才
いとあつき日元ぐんげはけうどのよ生なま
ひくすぐこ行ふ中将はきみをきつひ
行ふきつき撮兵人あまこきつひく。
西川より奉る年魚ちうきいのいし

ぶりやはきのれ更にくてうじてまのは後
例は大殿はさん源氏君ぢ中将は御あうる弱
てまあり見りざうぐくしくねぶこりに
海をりよくこのしみへこのしのけすくれ大内
きまあまりこひくずいと飯まで
見くさざうざきにこふ風をいとよく
あけども日はどうのくこうあきこうれ
白るのるほどやせみれ点までこそいとる
げまきこの見まぎ水はうへ見とくれるけの

あたまはしさいの目もわすれ果てのるさまこれ
もやさくよりの物ゝいとかるゝ色。
あうびきぞこえ。すきまゝくさすがよくら
しかこのゝんあたびこえとのぬほどよ。
こゝよくゝどよおみぶゝまぶどうせよあん
とはすゝめぼゝくねぶさかめぬ
べいゝんとよゝてきこの世物へなにゝ
くれさまじそるゝちゝせゆんもは
とゝもれぞいのまゝやまどのまゝどあづ

らゝきゝとゝてゝうちゝくさゝゝんまのがゝり
えおばゝねぶかゝこゝまゝたるやゝいゝ皆
いと係ゝしきゝのゝゝらんよせ物のれゝ
ゝふゝひ物ふ。
月三十オ
○夕汁あゆくゝのぜゝいとすゝこえゝうゝ
くわのき八ゝうきおえひまゝり。

薪火

薪雪廿六十ウ

いとゝゝしげまの影のゝりかゝるとゝ次ゝきれの
げゝやり水れにはるゝに見まゝのゝまを出の

この[illegible]れそ伏[illegible]

常夏七十オ

○月こそあきこゝろ[illegible]ぶ[illegible]まゐる。源氏君川ほ[illegible]ぶ[illegible]のくて[illegible]

やゝかゝる人こゝろよげ[illegible]ゝ人ゆゑて[illegible]

つゝ[illegible]ぶいしさに[illegible]ことを[illegible]

蓮火三十キ

○わ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

きて[illegible]御オキミ仕[illegible]右近のこゝ[illegible]

めて[illegible]

[illegible]やり水[illegible]

つ[illegible]たる。まゆみ木[illegible]

どゝ[illegible]

[illegible]

すゞ[illegible]

○たゝ[illegible]人[illegible]

[illegible]月[illegible]

[illegible]

夏雜

[illegible]七十ウ

[illegible]

出所ふぞろとみるおれらしてけりびまく
より見のゆゑ火みひのうぼるるのよのぼ
このよゝ云なり。

若葉十二丁オ

○ぶるいとゝにはありてだるぐ木草
城やう条なり。月をるさゝうまま
ぎやり水みがらと火さをしゝうゝ物ぐま
をまのりをとうゝ彩みたまくゝとさよ
ぎにしゝゝひ出てゝをときをのん
にくこのをりゝくゝやうれのまど分ひ

○日十三

みうをるに。君れ御迎れ松ひのぜいとゝれ
ぎゝうれ人ゝをんゝぢるひすぐのり。

夏木四十五丁ウ

○はれをよのさうひゝけしさゝうりさ紀
て。春秋の花ざりよりをゝしめやに。

春歌

れのきはどをるにうとをあうびた
まふ。

遠近廿五丁ウ

○こをやのにおぼゝれきくたるよ白ひ
いでゝ。ををうちやうゝ人めをゝ木草
れ紫をたぐすごくあとれよ見ゝるさ風

を。やり水このきはに人の前栽はそもだこらくそ。
涼しうあるなどてこそある笑てなるさ
あもしけいしれ。こゝろよけそのまゝきまをかく
御こゝろのさぶめくだがさることなどあつと
見とりて。御けしき紙さうはそこつい世
うしはいのうまをする。

紫文製錦一巻畢